

『文正草子』の中の身体に関わる表現

計良 吉則

順天堂大学医学部医史学研究室

『文正草子』は室町時代の南北朝以降に作られた平易な散文体の読物で、作者は未詳である。この時期は他に『鉢かづき』『ものくさ太郎』『一寸法師』『浦島太郎』などがあり、これらは江戸中期に大坂の書肆、渋川清右衛門によって『御伽草子』としてまとめられた。

『文正草子』が作られた頃は下剋上の時勢であり、「御伽草子」には農民や商人などの庶民が物語の主人公として登場する。中でも『文正草子』は「めでたい草子」と呼ばれるほど、絵にかいたようなサクセス・ストーリーが展開している。以下がそのあらすじである。

常陸国の文太という男は、鹿島の大宮司に仕えたが、後に「つのをかが磯」に落ちつき、塩焼のわざを行った。その塩の評判が良く、「文正つねをか」と名のり、長者となった。文正には娘が二人いたが、姉は関白の若君と結ばれ、妹は帝に召されて中宮となる。文正みずからも大納言に任ぜられて、一家は栄華をきわめた、というものである。

『文正草子』は当時の庶民の願望がうかがわれる内容であり、そこで用いられている身体に関わる表現に注目することは、当時の身体観を知るうえで意味があると考えられる。

初めに、身体の動作や状態を示す表現に関して。「行く」「帰る」「参る」「入る」などの体の移動や運動に関するものが圧倒的に多い。「されば、いかなる所へも行くべし」、「急ぎ宿へ帰りて」、「またも参りなと思ひて」、「塩屋に立ち入りて」などがある。

感情・精神作用に関するものも多い。「見るよりいとほしく思ひければ」、「主なめならず喜びて」、「おほきに腹を立て」などがある。

美的表現が比較的多く、「たぐひなくうつくしき姫御前なり」、「みめかたちよからんを」などがある。

病的状態・障害に関する表現は、精神領域がほとんどで、「明暮、病のここちしておはしましけるを」、「中将殿、例ならず悩み給ふを」などがある。

存在を表すものとしては「若君五人おはしける」などがあり、生命の誕生に関するものは、「若き妻をもまうけて産み給へ」などがある。

老若を表現するものは「齢七十ばかりなる翁」などがあり、婚姻や契りに関するものは、「いみじくも、商人に契りを結び」などがある。

体の清潔に関するものは、「藤右馬助、御足をすませば」などがあるが、死に関する表現はなかった。

次に、身体の部分や分泌物を表現したものに関して。圧倒的に多くみられるのが「身」で、「身こそ賤しきも者といへども」、「過させ給はん御身に」などがある。

五孔を表すものが多く、「よろづ草むらに至るまで、目をとどめ」、「耳にも聞き入れ候はぬ者にて」などがある。

四肢に関するものも多く、「足に任せて行くほどに」、「撥音の気高さ、搔き返す手使ひ」などがある。

腹や胸など体幹に関するものは、「大宮司殿、腹を立て」、「胸うち騒ぎ給ふ」などがある。

頭頸部に関するものは、「男の身にて、面変へず」、「まみはひ愛敬づき」、「さつとかかれる髪の体」などがある。

分泌物に関するものは「涙」が多く、「すぞろに涙を流すばかりなり」、「御二所ながら、涙ぐみ給へば」などがみられた。

内臓に関する表現はなく、「肝魂も失するここちして」とあるのは、気力を失うほどに驚いて、の意味で用いられていた。